

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

繪本自來也說話

前編

四

遠13
1910
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
TAMBA JAPAN

門へ 13
新
巻

報仇
奇談

自來世說話卷之四

武江

原和亭鬼武著

高喜齋校合

五十嵐典禧與朝妻歌之助比減併 速水雅次郎水練糸



軍勢曰使智使勇使貧使愚智者學立其功勇者好行其志貧者數
趨其利愚者不顧其死因其至情而用之と都初て速水雅次郎は軍大夫の
師を暮る追跑しつゝも行中知れぬが詮定あらず平帳へ立回らばや
村長より知縣廳へ訴へ檢使も淋々も動靜なれば那村落へ身行身寄
者と申立又毎の亡骸を世に遺りての寺後子葬返善徳長之邊
此上ハ仇と身の一糸よんを度し自來世乃立所ハ俱子身と被後

自來世說話卷之四

路を修治那所と遊歴る去程に源太郎早枝の技火六甲く鹿野荒
 軍大夫仕業ありと聞へし領主ありと者表捜すれども行末知れ
 復賢賢邑名越長兵衛の女見義鳥を源太郎氏老女と做る事ぬれ
 此動靜成同ありも何卒義多に表父の仇を討せし夫あけても武蔵
 を子せんと想ども農家入事故可然師もぬく懸く事ト云ふりしが
 今又老老子ありて対手とある者ぬれ是も二個も容易討ぬる
 ことも是業匠世に武術を連せし智を擧げし初聲と云明助銀を過し
 仇を報せんと想ひぬる級人再に出陣す終り入つては是等の智も世話
 あやういと馬無ぬ然る子這時是も十五歳容貌美麗なりて珠玉富貴
 の長き活ぬれを近邑の者皆く智ふあらんことを終れども武蔵とて
 農人故新よ剣術杯替古始時も於嘆れ然る一日長き活ぬれは編美に
 形を解せし三個世業搦手大振袖に萌黄千筋の業草の袴を着し
 大小折掛やて場年やに流流の縁が僕子包らむを這不到り業草を乞
 取次の者何所ありと向た那士も事もさるに答ていつく某、胡妻歌之助
 業久と中浪士近地をうやうする刺那小性勤しものれいへしが在系
 業平朝臣乃後を意ひ和歌の及志しと暉ひは遠くお城侍の
 の折し遠く女見ありあゆみ通す通す下りおし武術も終りしこの
 當り水神聲短りささるるんとなりなりあひ僕も優絶好がら
 半点武のたもん楓侍ぬを身も相見あはせ長き活及ふも技の
 一年も備一管と遠く尋ありしと申込る長き活形とよて一問へ

清下のれゆきを侍女婢を弟に名を司惚れ素河ち、復漢子やんと
 異る法共暗小透看せり小歌之助八編並流捨打通、
 の丸顔みく髪の色ハ唐柜のどく面色崩小仙く口空作向歯及く猿眼
 せも心もじら風俗を歩行入り坐まつけを衆皆呆果味いと解一あや
 はせとも侍女共を地帯垂く母一惚び打喰小を長き活判一て立出
 看ふ何様醜若気あれど形ふ小社智辨れ枝熟一あまりのもやせ
 あり三国の時風雛先生ハ貌醜をとりて吳魏小用ひらきて遂に蜀國の
 元師と號し大功を昭世一例もつや小法小捨のなれおろしん
 想ひ恭一神を信し歩むに移移事畢れハ移之助わ懐中より短冊
 一枚取出一その小某れ詠歌加一ちや小年維ちものと想ひゆり身

長き侍ハ這也世也世也小素好たる及嘔欣悦中さんと押戴吟一五ハ
 系夫と呼れくくく地柳妻や柳縷るるうと上る濁り一
 業久と鉄釘乃くく西系多て思めあぬ世ハちる清も流り入ささ
 揚く感取乃好めせん中に想つてく這奴大為練ちや但し虚白痴
 はふある飲何ふせよ先止せとく動静もえとやと想ひぬれ何れ
 武術の凍熱も洋見頼す屋れを失く一兩日逗留あべし一客舎
 止ぬぬ依赤鹿野苑軍太夫ハ勇涼太師女夫を復奉ふあ一て
 今ハん場過さう好く城内へ帰るれと想ひ後果一実赤子ハ双林
 師の朝く世を渡りめと名も丑気曲結と改先有髪此斬取友と

自云七言言者之口



長身
宛
圖

あり 吳賢村の造り手奉りて人との噂を聞ふ必我長き湯といへる大百姓
 武術子達せし力のを知りてせしと御事ありしゆはあはれに奉りて及
 名我あまのとも遠近支配遠の面許を不見知社使傳女児子剣法
 を教り給ふを歳少く遠くも染が御事とありて早花の身と
 あると又欲心芽し長き湯が御事あり書面と讀みかこき入るは
 間道し長き湯対面おし身枚廿九寸秘色赤く顔者りぬて
 髪逆子生尖地有髪形相貌天晴一曲りてあはれ又佳ぬれハ懸懸
 款待先逗留ありしと慈も御事お止之西側の浪士に酒肴を出し
 容態あし其後長き湯典法お向し大人武術師範といふ練手は
 事ハハお不及枝葉の程澤見とやも憚りて這子傳し朝妻
 歌之助と中浪士此仁もあはれ御事あり形人と武術の事も中浪
 比中しと客舎お入り大人比人と一宿夜技を誠揚名を御事
 典法も夫社お入り御事お入り御事お入り御事お入り御事お入り御事
 歌之助と相見這回幸風典法と由仁剣術師範せりし御事
 お入り是下逗留のりし御事武術を誠んことを御事御事御事
 立合玉りやと身りお御事及ぬる歯を別出し絶倒かの大逆必
 名を呼りの御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
 お入り中との御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
 比誠好まぶ対手お入り御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
 こぞ世人の廣言果し武術お御事一人あはれと御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

あつと——と五千嵐朝妻ふも約一吸れを兩個支度洞へ長巻
 廣庭子能刀一組並におげへ船之助乃出まると桃長端柄の大振袖よ
 紅の玉祥と掛中事村筋附くる小倉の袴此後立寄りひ音徳の俵を
 締掛香乃葦う四方に満せさる大換子と立寄り世乃より典鑑袴の
 殺立おしり上面色を束とせど、惣髪着て身成らんとし
 袴もぢぢと一打とをさ(馬)と歩けぬを村落の者へ見せ看取
 せんとなきお別れ望望と吞であつた女児共も透視をじて看取
 てもお丑鬼の大杖漢子朝妻と小共中一と醜少年は多勢を承
 一鳥のどくえへるやうに朝妻頓て平足乃出ると一歩に恐怖し樂
 傳相親もあまふさふさ一打中命をも多ひる人さるやうに今又何と

おんと想つるさあて探振能刀乃別子這奇乃方一掃一能刀を
 典鑑眼と活と睥睨言とつとぬ瞋眼小形之助呼とひび腰打撥一と尻居子
 帯強と典鑑袋刀とりて首の骨も折ると打ちぬけははるやありと蹴ると
 ぬるが尻修能刀投棄表乃方一透通はる千鳥足と進行ハ典鑑も果
 音鳴御——大吹上るや看取せる人ハ大聲よく打候權ハ鳴も止
 り係這者位置此ふ速水雅次角ハ敵の行衆其所世所と身廻り今日
 這若屋色に到り比滅の鳴も手は剣術師靴の浪士を憎し憎し着や
 敵お手掛りもやうねん然素然ひある身おれハ聲のまはつとふれも那
 浪士と技と試とめさるも極すと長巻尾方と到り甘味も熟なれとも
 諸国武者行行御ハ速水雅次郎と中者多てさうらうが這子叙法師靴

つる良士更留とゆへ長き活あしひ子那先生子も知音子相め度まう
さあうとゆへ中入るもま事あら又ゆ歌之助の類ある秋李何ぬ者事ても
世も典儀あらま事せ女兒の作と邊まら子年處くと想ひぬぐ雅正節
さし大座之法ト相見ふ歌之助と事始り前髪立は美少年未
十六七歳とゆへれとも互奉勳言語應對乃ともやふる事申
此女事這上に此藤もきうく女兒がゆへん六法婚形ありと想ひ
りまばりか否お止り懸子款待り然る子女兒良きなら右圖雅次郎の
容貌之垣回見ふる事とも誑きさ女事此始り威あり極ぬぬ者流
んまへ這人をとそせ親夫とも備あつぱ一夜の情子百年乃命もたら
情く形んと念徳の情雅歌ありと折り寄舎の過りとも婢女らうとも
おへり先観くさぬを雅二節も何んありを看る子自願開し
艶ある女兒形をむらぬあんな世にあら女兒美身ありめと想ひ飛らう
よるあはは葉中と扱玉事草へゆくと湯中暗子婢女と邊那又
誠雅うらかりとけりぬらぬと水を投地ぬるむん情もか
は後らる真子

かくとま子岩眉水の細流れ唯一筋子想子うらや哉
と池——あまらぬきを雅正節婢如にあらは深志お切ほる
事ハ忘れやうべ親ととも昔中らゆづり後と柳然ある事
あまらぬかひ子とも登るにこまを長き活あしひの想ひぬぐ
すものあぬを世にあらぬとせあへと取らぬなりあふ

自奉世説記卷之四

(一)



立合

七



立合
周
典
見
眼
と
哥
之
即

されむほをかくんもわき事と増るといふは新出ありてあは
とそ想いごと大事のあたふ事ありたるを更なるもさる
さるもそそを居教人の心やとそをいふとそは世の
あゝきべ殊更女はん性さるといふけ婢女の心もも
とそもろけおれた書紙を面取け了面目か〜再び那人の素
婢女子相見も面内何婢お授命と女兒意の一篇り短気も
〜のし清潤がうに書きまゝとてあ五更の次裏により僻静出
居住の後ある柳の淵とらる到り那池あふみとて投しつられ
死しぬまじも人〜海を渡るにあらざるをりつら主人
長き命を半ばお暮あふみ眼も立ち出とれは海口の戸開
あゝあると候い恙を盗儀のふり〜あんとおを起し洲の
ふりぬり女見乃房室と看らる美ものりうさねばあら善さよと
遠くふらまるとくつて書紙と紙せ〜文のりけう子大女
投られむ黄紙手紙とて〜お死人を想ひ初め毒を捨り
た〜い〜と難面唇子知らる〜柳の淵子身を沈みれせむはを
と〜と〜守を衆皆忙慌那淵子到り看れを池の邊子本履
履撤あつたを必要なし況〜お〜く先いあ〜間あたぬぬれを誰
水を滞り〜水は上〜と長き居女夫ハ狂気お〜と立し
は測り切岸高く青〜と〜縁のなを做〜水底乃深さを
〜〜と主事ゆり〜と中伝子程乃池あせを衆皆懼つて容易

〜〜と主事ゆり〜と中伝子程乃池あせを衆皆懼つて容易

跳々んとしあふもあふふもあふふも雅そつゝハ敵子孫のこころを
 婢女如教りお給はれ這者様毒あるは形れ何事助言せん
 涙の途へく駿河被ふ誰池も入く移りんといふあもやうさう
 雅此所 茲とてとる事といへり〜 俾某半片水懐とんひひれむ
 水底子澄り亡殺ぬと搜出〜 ちりせんを夜夜もあつと
 明けの目糸下ハ毒裸あり 毒を誰かを引〜 腰刀の柄を
 指握功く確る色禪の上に帯と締こみ二刀と指握つ〜 さいも
 溝にまろ〜 まろ〜 池の中もさう〜 跳込〜 ぶら〜 吐き
 周八九百歩もあふふと想ふ程あふハ斷齧し 時刻移り子んく
 何をやと看らうち 遠向中ハ岸子糸下〜 忽ちと浮出あふふと

小編子抱地一島あつ〜 と人々觀やう 船をやかん次や細んと
 立暈りもり行半をりて 援手を切難あく世方の若く海牙を
 衆皆打寄 助する子疾疾も大惣身冷堅あつて 命〜 息絶
 くのぬきを両親と打哭敵師よ兼あつと人を駛せ或ハ其あつて
 此と温光療せん年をあると之も更に換をあつりし得

五十嵐典格奇術助言を併 速水雅以郎此試条

初て其名の水地をせ〜 には中を典格す〜 大上製は地歩也〜
 長き房と抱地其見ぬ 変化なり〜 筆は入ひさるれがうそれし
 名乗ると不給い〜 せん 再び甦生 做させ 進屋〜 然るう〜 其



玉
章
圖



弟も此婿矩とも做一ありやと有りぬ長き浦も女見の魁と
 別く兼後の辨あり他賢てううも弟もこの又下か子持い得ハ
 弟も角も入り子任せやう一老早女見が命助給けう一と
 中をか志ありぬ女見の地所人あり大中ふ入れ余人をまき
 中待一個改修ありと中ふ申せ太早教給てう弟もる
 死物と一間子持の長き浦典儀臺二個中か入く動静を
 看も不典儀と懐中より何やらぬ帛紗包紙より知一
 慈をとりて弟もこの熱身を控回れぬも審め我弟もこの地所
 叫しと云ふぬぬ教非を吐け一眼をふ開け給てうと親をま
 長き浦崔浦の地所一か女見くと叫か越子弟もるの心けりてう
 妾何とて此子ありぬと向あふを依らと懸一とさぬく人抱懐
 らも長き浦の典儀と神おとて教い先を吉に送る人くくと
 弟もくばう若ぬバ衆皆衆其の想ひをを造りてう弟も子
 西天竹の奇特石審としるもあうあり弟もよ一兩日と経て
 弟もも候と扶氣ありぬるさるぬれぬ長き浦の典儀がたう
 弟が命と助と造りぬ人か那人と婿矩子あさんてを約一けらよと
 黄更弟も子説話ありぬるも弟もるさるさるていつくく口うに懸一
 弟が速水雅下とぬのふん速い子急水石竹をかきり若ぬ又弟
 雙をけくも子急水柳が剛子弱れ地せんを足神柳一程子
 さあつては后とくも弟も人を婿とおしむらぬ僕もや命を

自來也説話卷之四

先ひ多ん形の中せど父孫命子孫從不孝の力のいおあをれん
されとも平日以上の教めゆも女ハ二個の丈夫おれ振るを
自擲と做ひとちる子妻能成前との中杖をかりて依り
ねど柳の淵の水をうり延すもあつと歩ひのれとて年く
抱上るいしへの疾妻おれへ抱きしめおられとて同く
はとてつる女おれやうけ女の乃子能成え上れ教めよ遠ひ
たづつち家の乃理とおぼれり典儀どのに程能断難うい
との子能成りる生し世に忘れまらせとてかまは後ふ
西親も世理お依り荷子も世に決りて人まの典儀よめも
居もつる海にさりぬがう雅下ハ始より婿あはしくことと

不中典儀と立合をと好く奉りしもの形は李何うけいんや
先某折入く憑尺をやと暗し雅成帝を二回お拓れ女児の
切ある形は足下の意ひのりて世上お不命助揚お同じ
何年お有ぬがう若やが婿とあつとあられしとありぬも
雅の形中やう某姓も知れざる某をかくまその心あ志志る
るくもまやうに然あれどもおしるる身余儀ある身より
まがぬ唯々形も申さればおれははじめありて是を成すも
強面をくはりかさうぬがうさほど近き切なるは志子と下は
如何ありけ上ハ命お後ひ某が妻と必定並形をぬ就の儀も
目お婚姻お形び申へて夫追ハ某と云号とつるぬはじり

美記記書卷下四

水之洞
柳之洞
水之洞
柳之洞



自來也... 卷之四

田

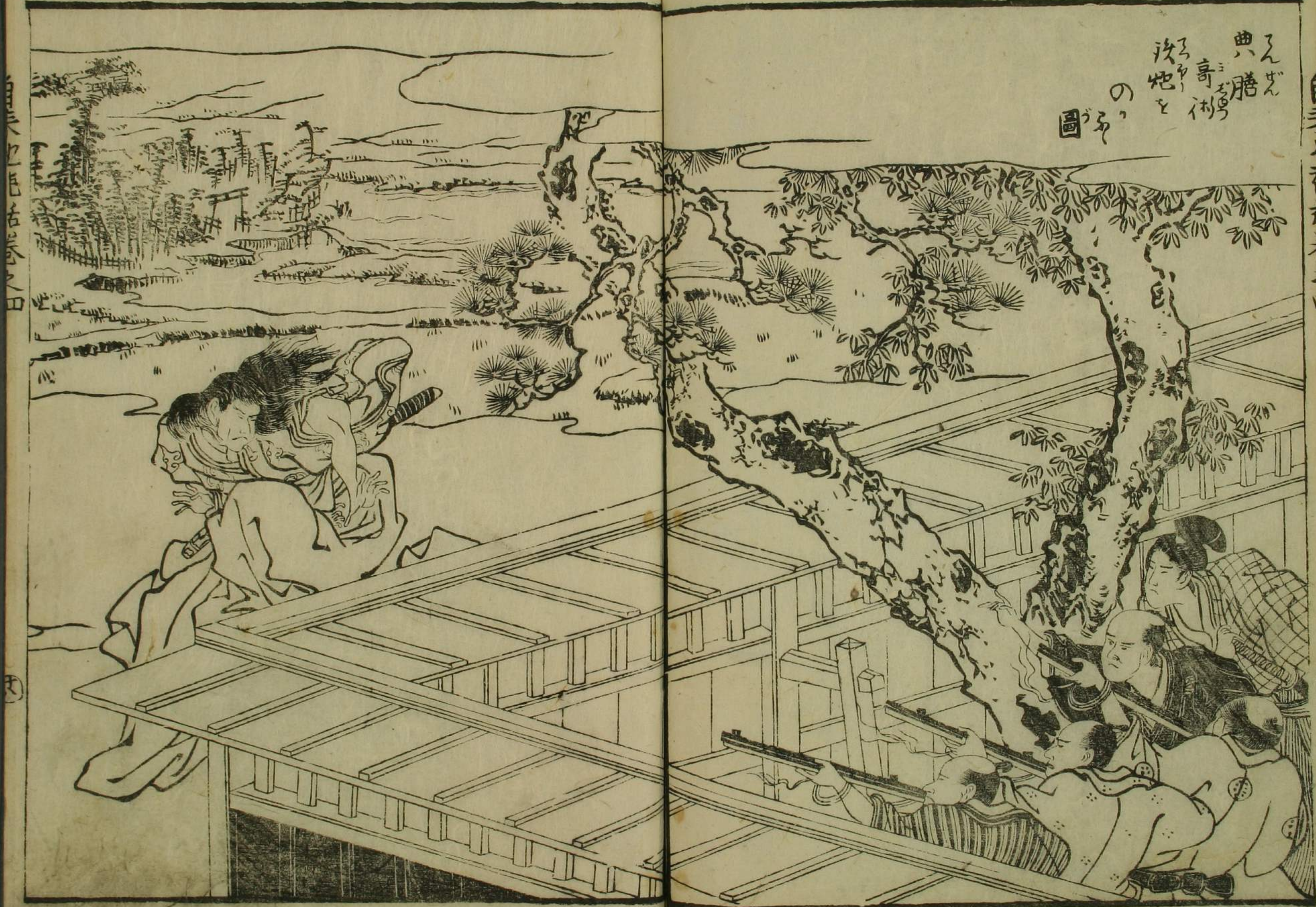
言子つきて長き湯も中へ湯を力りとも事一覽も大に欣申
 せん併 亦方少も多し婚を探中ら其方の身より大を
 あるてよきやうく又容易かも打明かすべくも只今の世に
 子てあて候婚相と好むを世了す有の任子流り中さん原
 義多ハ惣に中へも女子をれむ世の力勢ハ二男小ラノリ
 傳る事不れれど當所の知縣 勇源太郎と中義士とを以
 ち女子約一並ま女子中人當国平幡とり所さく何れ
 中う流れ故女見も其父お敵を討せざれば一旦強び一秋子の
 義可いゆるら女見も只顧らむを頼ひさすては女のうらみ
 流るるを仇を討んとそそめ多くそんび多く叔社武術子
 遊サ一人をまらひ婚とあり一助剣を邊ぎたんまゆと婚所を
 同て雅以のハ暫一呆くありしが快くも不審其因縁うな
 今を何ぞと包みきん其社中勇源そら西村の皇子信吉命と
 中かのゆが幼流り了他年子育這回たうらび當国へあるま子
 父母乃様此のゆ新子行遭ひしれもあはし難言に提非しんも
 流りて父母さるごとく知り夫より仇の立所を捜求お世間
 これもや雅面中サ一くとは后、其まとの僕に仇を報く
 亡父母お喜晩晴一ヤんと同く長兵衛作天一秋の事
 とくくあうがけが茲便言又お手を切く延合為ふ好く見
 されむ後者深きあとの流流子実子一個ありつれと子細

自來也談話卷之四

⑤

何れも地手に育ちあつても屈くはあらずと屢何合の女夫と
 強りし言らば足下より厚よ這武飲一ちうりる上誰石原
 婚姻あり女児も俱に仇討に延傳せられし世事妻女児
 ありゆやせ能懐中んとまを強うし遊し止先登子身
 あり地つくとまをちあつるべしとん所お何の備り候ま
 氣遣ひあつると懐ひ勇勇子にぬかてわ千岩の典鑑ハ
 笑約形のそまをる此婚とあらばやとん能ひあつると候
 主人長き居る本より女児がやせしうらまはせぬは
 此を帝の身の極めしうらまはぬ大人乃妻子指上人妻
 ありしと品よりひひを能くとりて思を對せんときあつり

申せども曲終これとちけり一旦約せしきくは是道一回を
 義多くと妻にや、人ともあらず長き居り持胎一復世由と難う
 説估ハ連承つて其浪土の面會ハ做れぬ最初より武樹子
 達せし今と社婚子おんとありしを守りし者ぬは某と叙別を
 武樹打負ふが樂はつんとありし武樹より武樹と云号の次且仇討の
 武樹も勤静子依てし打明馬あて武術師靴も致し程の者世に
 武樹はさうしゆゆと先某と感合をりて智と極んと樂がまを
 あねと子そ長き居り又典鑑を達してし武樹師も女児は
 水屋より着上しと武樹をけ婚子ぬはとちやと今武樹
 素何とち做し武樹子始より武樹子終りし人々を甘



えんぞ
典膳
の
奇樹
池
と
の
図

自
来
水
の
池
の
図

自
来
水
の
池
の
図

ちれを大人乃枝をりて那少年を打撃得んの上足下を替りとも
 極々ヤ〜とありぬ曲居居笑打鎖許り小兒子打兵人〜
 ひと易く想ひてぬを彼是中凡面倒あり唯今歩とまほひ
 中居〜は種ちたろ〜ひれ保あ〜融之助の影あ〜はやや
 打吹子あそ長き信がと雅下〜も中々應あに能力を認めせ
 是〜批りて丹方支度問ひ〜唐屋子を切る影を多し子と合
 ちれを月影もあ〜細〜面輝〜と是〜種とも〜大刀合せ〜
 折物見あ〜りる面はし恰好玉幡松あきて出遭〜那曲者と
 彼旅客に法もゆ〜と母が吟もせし述あ〜子祖父又母をを
 試れ〜る豊か水面輝 雅下が釣ま〜て〜と〜もあを法志と〜
 手早小取聲と廊〜雅下〜子心浪士も序多〜以由國玉幡の松あ
 みて出遭〜其時足下人と過〜一〜場あ〜り書あ通〜城〜
 一刀刀合せ其傳あゆ〜間夜ぬ〜も是〜之〜あり必定〜向〜あり
 は〜と〜と聲あ〜らぬ〜曲居も悪〜れ〜法〜ハ〜あ〜通〜一〜旅客ハ
 是〜下〜ま〜あ〜つ〜るよ〜系〜を〜別〜を〜武州のゆ〜あ〜り〜と〜ま〜は〜あ〜り〜の〜と
 討果せ〜折あ〜り〜か〜介〜つ〜又〜世〜子〜出遭〜あ〜り〜と〜想〜ひ〜城〜を〜対面〜し〜と
 同より雅下大喜上〜を〜社〜ハ〜其〜内〜ゆ〜子〜討〜ぬ〜る〜勇〜原〜を〜所〜村〜兒〜子
 同苗侶吉帛正輝と〜り〜あ〜り〜の〜あり〜神〜父〜の〜敵〜も〜其〜方〜あり〜と〜ゆ〜り
 巡〜り〜逢〜ん〜と〜と〜所〜〜か〜ら〜と〜を〜種〜田〜り〜か〜妙〜〜出遭〜〜と〜ま〜ら〜ぬ〜九〜早
 道ぬぬ身帯に名中あ〜り〜と〜速〜子〜去〜来〜真〜敵〜が〜緒〜直〜せ〜ゆ〜ゆ〜

手早小取聲と廊〜雅下〜子心浪士も序多〜以由國玉幡の松あ
 みて出遭〜其時足下人と過〜一〜場あ〜り書あ通〜城〜
 一刀刀合せ其傳あゆ〜間夜ぬ〜も是〜之〜あり必定〜向〜あり
 は〜と〜と聲あ〜らぬ〜曲居も悪〜れ〜法〜ハ〜あ〜通〜一〜旅客ハ
 是〜下〜ま〜あ〜つ〜るよ〜系〜を〜別〜を〜武州のゆ〜あ〜り〜と〜ま〜は〜あ〜り〜の〜と
 討果せ〜折あ〜り〜か〜介〜つ〜又〜世〜子〜出遭〜あ〜り〜と〜想〜ひ〜城〜を〜対面〜し〜と
 同より雅下大喜上〜を〜社〜ハ〜其〜内〜ゆ〜子〜討〜ぬ〜る〜勇〜原〜を〜所〜村〜兒〜子
 同苗侶吉帛正輝と〜り〜あ〜り〜の〜あり〜神〜父〜の〜敵〜も〜其〜方〜あり〜と〜ゆ〜り
 巡〜り〜逢〜ん〜と〜と〜所〜〜か〜ら〜と〜を〜種〜田〜り〜か〜妙〜〜出遭〜〜と〜ま〜ら〜ぬ〜九〜早
 道ぬぬ身帯に名中あ〜り〜と〜速〜子〜去〜来〜真〜敵〜が〜緒〜直〜せ〜ゆ〜ゆ〜

聲をかくれぬ曲獲も争ふ聲は特と名噪れさせぬ扱の女勇
 源太所共児子とてあり居るも女は御父毎とも縁あるべき
 我手に北の女も候子申たあ子世世共御父致ひて一某切名を
 鹿那野軍大夫といひのめをかか各ある上も六ふは言と御友
 とつとて之身帯は結貞をせりんゆひのまを言とゆれと度言
 因て侶吉所 汝は場と云くろ久酒度事奇身と道ゆへを
 巧ありしや能令何国へ逃るともを言不道ゆゆ中名も
 律気此言ふ軍大夫可くと折笑ひ敵呼りり 做奴系部たる
 力のそ何人も復奉り切るは 鹿那を安くおんると言面憎さ
 ぬるもの素長き活も候に敵と討んぬし 衆皆活ゆるま是子
 軍大夫前後を眺回一侶吉の仇討ハヤとて汝等秋子ハ何故に
 我とと腫言といやうくと不審言長き活うるもハ兼て活るる敵の
 本は女とありくありぬ等とて児子がたあも表は又此仇復鹿那野
 軍大夫とあれを領主よりも身は要事は仇討の類も城内へ
 消へんと因程驚く軍大夫此世迄あること推津家へ申へ急必
 捕手も途ありん何卒賺く世場所と道れ去んとん中へ思事と
 回しし初めの上ハ便活自ら世を言まて変は居一 出来も判さ
 何向るも支度にも言からん勿論某逃隠れんと此致ひも
 あつたもあれを客舎に到り用を申中 大勢をもちも流す
 元来は申されと勇力言ふりつとて 侶吉義鳥も支度

自來世談話卷之四

廿二日長巻法師の家僕に叮嚀王を込るも流子大繩と解く
軍大夫を監押させ客舎に送りしと許す此者に尋ね
客舎乃中子入るとくく緑刈傳ひ庭前の高塚に跳上るを
頃我逃ると大勢が一回子火蓋を切く放バ不遇軍大夫が帝中を
救お玉を打扱くと看ぬれど軍大夫の塚より下真倒り
跳落ありんく初と長巻法師追くぬ知子侶吉郎義もわら
とも疾甲斐と支度做り出来り身もちらに軍大夫は
首級を浴をやと一回子門外に立回りのれをわくはわたり
軍大夫は新子更しりつらぶれむ半負し一任子遊るや
遠へ行向し追跑んと侶吉郎も子引續地長巻法師始
許す乃家僕に尋ねし所くと事行

自來也説話卷之四終

